

行脚俳諧師石蘭と『梅の会集』

大内, 初夫

<https://doi.org/10.15017/12148>

出版情報 : 語文研究. 37, pp.76-84, 1974-08-31. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

行脚俳諧師石蘭と「梅の会集」

大 内 初 夫

は し が き

寛保・宝暦と次第に芭蕉復帰のきざしを強めていった俳壇に、俳諧復興の運動が熾烈に燃えあがったのは、蕪村門凡童の「あけがらす」序文に窺われるごとく、およそ明和・安永の交であろう。京・江戸・尾張・加賀・伊勢などの地で、中興の俳傑たちが革新運動を華々しく繰り上げていったことは、今さらここに云々するまでもないことである。そしてその影響は、さまざまな形で当然西辺の筑紫地方にも及んで来る。俳壇活発化の端的な現われとして行脚俳人の来遊のごとき、特に前代にその比を見ないほど、有名無名の多数の人々を迎えているが、寛政五年は芭蕉百回忌に正当することもあって、その前後は行脚俳人たちの引杖が甚だ盛んである。

本稿に取りあげようとする石中庵石蘭は、寛政期に筑紫に來遊した行脚俳諧師の一人であるが、芭蕉顯彰に生涯を捧げた蝶夢法師の助力者としての役割りを持ち、蝶夢の事業の推進に貢献するところがあったのであり、又寛政再遊後は、北九州一特

に遠賀川筋俳壇の指導育成につとめ、この地方に正風を培い、文化二年筑前芦屋に没した流寓の俳諧師であった。

筆者は、かつて「九州俳壇史の研究―俳僧蝶夢と九州蝶夢門の人々―」（鹿児島大学文科報告第二号）の稿を草した折、石蘭行脚のそうした性格に気付かず、そのため石蘭に言及することをしなかつた。従って本稿はその補正でもある。

言うまでもなく、地方俳壇史研究において等閑視出来ないものに、多くの来遊行脚俳人の存在がある。かれらは地方俳人なり俳壇なりにいろいろな影響を与えており、中にはその土地に骨を埋め、地域俳壇の育成発展の捨て石となったものもいる。しかもおしなべてかれらは、浮草のように漂泊流浪の境涯に身を投じていたゆえに、その出自経歴などを明らかにしえないものもまた多い。石蘭についても不明な点が多いが、管見に入つた若干の資料によって考察を加え、行脚俳諧師としてのその行動と影響について具体的に眺めてみたい。

前号を一萍といった石中庵石蘭については、手もとの『俳諧大辞典』『俳諧人名辞典』などに全く何らの記載を見出しえない。ただわずかに平林・大西共著『新選俳諧年表』の

(文化二乙丑)石蘭歿、五月二十日、石中庵と号す、月居門、京都人、筑前芦屋住。

金子健二著『俳人遺墨』の

石蘭(幕府の字工、石中庵と号す、月居の門人なり、文化二年五月二十日歿。)

の記述が目に入ったが、後述のごとくこれらは多く信用しがたい点を含んでいる。ところで石蘭についての先学の研究が全然ないわけではない。俳句雑誌に発表の小篇ではあるが、『東炎』(七巻十号)掲載の志田素琴『俳考録(二)』に「乙児の末弟一萍」、同誌(八巻三号)掲載の西村燕々「一萍あらため石蘭」の二篇がたまたま管見に入った。

素琴の論は、几董遺稿『寛政己酉句録』の一萍についての「駿州行脚来訪 乙児末弟のよし」とある記事に興味を抱かれたもので、贊川他石著『六花庵三代』中に引用の「丁未迺姑洗」(天明七年三月)の刷物に「駿東藩中連」として一萍が加わっていることを指摘され、一萍は沼津藩士で、天明七年三月まで沼津に在住し、寛政元年四月までに致仕して行脚俳人として出国、同年四月義仲寺に入り、五月剃髪したということを記している。ただし「乙児の末弟」ということについては、乙児の実家矢入家も養家松木家も共に駿府の商家であり、一萍が藩士であるとすると、乙児の弟と称することに疑問が持たれるとされ

燕々のものは素琴の稿を補ったもので、諸集に散見する一萍乃至石蘭号の句を紹介し、一萍が義仲寺にいたのは寛政元年夏から二年春(ママ、三年春の誤り)までで、義仲寺の看主居(ルスイ)であり、寛政三年春に西国行脚に出立し、四年の「奉扇会」で「石蘭」号に改号していることなどについて述べている。

この二つの稿によって、一萍後号石蘭という俳人の大体の経歴は察知出来るものの、なお疑問・不明のままに残されている点もかなりある。

第一に石蘭の出身地である。「新選俳諧年表」の「京都人」は例外として、諸集に「駿州」「駿州沼津」「沼津」と肩書するので、一応駿河国沼津の人と考えられよう。しかし蝶夢編『新類題発句集』(寛政五年刊)には「駿河石蘭」(三句)の号と共に「相模一萍」(六句)号でも入集しており、これは燕々の言うごとく同一人と見られる。おそらく蝶夢は一萍と相模の関係を知悉してかように肩書したものであろう。筑後田主丸の三浦其成編『十百仙玉集』(文化三年玉屑序。以下「仙玉集」と略称する)の副本には石蘭を「相州小田原ノ産」と記しており、これらから考えると、かれの出生地はもとと相模国小田原であり、のち仕官の關係で駿州沼津に居住したのではなからうか。

次にその身分を「俳人遺墨」は「幕府の字工」とするが、何によられたものか。沼津は安永六年以降水野忠友の所領であったはずなので、この説は疑わしい。「六華庵三代」所掲の「丁未迺姑洗」の刷物に「駿東藩中連」として互明・只弄・波文・合柳・一笑に並んで「能きぬは妾下りか桃の花」の一萍の吟が見えるので、素琴の説のごとく沼津藩士であったと思われる。

石蘭の姓名については、これまで全く明らかにされてはいない。しかるに、前掲「仙玉集」には「性陶名は秀□」と記す。この秀□の□は、多分筆録者其成にいかなる字を当てるべきかわからずに、□して「タル」の振仮名を付けたのであろう。ただし、芦屋金台寺の過去帳に「石中庵秀字石蘭居士」とあり、名は「秀字(ヒエタカと読む)」の可能性もある。陶姓については「六華庵三代」に「乙児が陶氏を称し、官胤亦これを襲ぎ、その門人なる小田原の円城寺嵐窓は乙児門下を「陶門」と呼んでゐるが、その根拠はわからない」とある。駿府の旧家矢入家に生まれて松木家の養子となつた乙児は、別に陶姓を用い、その高弟で六華庵二代目の官胤また陶姓を用いる。こうした関係から石蘭も陶姓を称したのであろう。

『寛政己酉句録』の「乙児末弟のよし」を素琴は実の弟と解し、「一体行脚俳人のいふ所には真実でない事があり得る」としてこれを疑つた。が、この「末弟」は実弟の意でなく、末の弟子として解すべきであろう。石蘭の生国や身分などからそのように考えられる。結局石蘭は、駿州俳壇の有力者雪門(筆名)の乙児の弟子の一人で、明和九年乙児没後は二代目官胤に兄事していたと思われる。「俳人遺墨」などに見える「月居門」というのは、燕々も言われるごとく月居七部集などに石蘭の句が全く見えず、はなはだ疑わしい。

ところで、石蘭は寛政元年頃沼津藩を致仕したらしいが、その理由は明らかでない。しかし、漂泊の象徴でもある浮草に因む「一萍」を号していたことなど、性格的にも流浪生活に強いあこがれを寄せていたのであろう。年齢はこの年が師乙児没後

十七年目であり、その後なお十六年かれが生存していることを考えると、この頃すでに中年に達していたと思われる。又かれの死没翌年に芦屋に供養の句碑を建立した妻知栄の存在は、流寓時代の晩年にめつたものとも考えにくい。流浪の原因は、おそらく藩士としての公職や日常の家庭生活のわずらわしさに堪えられず、すべてを放棄して漂泊の境涯に身を投じるにいたつたものとみられる。

二

沼津を去つた石蘭は、やがて近江の義仲寺に身を寄せ、第七世の無名庵主沂風の刀下に雑髪し、そのままこの寺の看主居(ルスイ)としてとどまつた。そしてこの頃石蘭は、几董を四月十九日に初めて訪問し、同二十三日には沂風の書を持参して再訪、六月十七日には刷物を送付していることが、素琴指摘の几董遺稿『寛政己酉句録』によつて知られる。多分石蘭は夜半亭三世几董に近づこうとしたのであろうが、間もなく十月に几董は死去、石蘭は「枯芦のふす間もなみのうせける歎」(龜筑波)の悼句を捧げて突然の遠逝を哀しんでいる。

翌寛政二年十月、かれは義仲寺の看主居として年中行事時雨会の営みを催し、「時雨会」を編集上梓した。

寛政二庚戌年十月十二日於義仲寺興行

肝胆にしむや液雨の魂祭

蚊山

道の誠を木からしの声

一萍

山鳩の幾つか啼わかつらん

千影

(以下略、歌仙端物)

この日は例のごとく開扉し奉るに
しぐるゝや絞る戸帳の唄いろ 一萍

本集に特に駿河府中・沼津、伊豆、相模小田原などの俳人が多数入集しているのは、編者石蘭との關係によるものか。

翌寛政三年春、石蘭は沂風に同行して筑紫行脚に出発した。この折蝶夢法師は次のような餞の句文を贈っている。蝶夢は沂風の師であり、義仲寺の復興や芭蕉の頭影に特に力を致していたし、石蘭の亡師乙児とも親交があった。従って義仲寺に身を寄せていた石蘭が、蝶夢に近づき、その強い感化を受けるに至ったのは至極当然でもあった。

沂風・一萍に餞別

ひとりば仏像造立のために俊乗坊がためしを追ひ、

一人は俳諧修行の望みに芭蕉翁の古きを慕ふ。かれ

は後生の縁を結び、これは今世の交をもとむ。その

二人を鴨川に送て、

ゆけや雁声を合せて海山に(草根発句集)

この詞書によると、沂風の旅は仏像造立勸進のためであり、石蘭のそれは芭蕉にならっての俳諧修行の旅ということになる。勿論そうした目的もあったであろうが、実は二年後にひかえた芭蕉百回忌正当の蝶夢一門による追遠の大行事について、西国蕉門の俳人たちに援助と協力を求めて回るといった一面もあったようであり、特に石蘭の旅にはその傾向が強いように思われる。

途中二人は広島(16)の春日遊梧亭に「つくしくだりの同行二人」として句を残している。筑紫に足を入れた二人は、まず豊後杵

築を訪れており、この地には蝶夢門人たちがかなりいたが、二人の来遊を好機として、沂風に導師をたのみ法西寺に芭蕉時雨塚を建立した。「時雨塚百回忌」序に「かつ過し年粟津の法師が来りしを導師とたのみ、石をたて、風月の靈位をとどめ奉りし云々」とあり、又「寛政三亥年五月十二日 蕉翁の短冊を法西寺の境内にうづめて時雨塚と名づく。その供養の日にまうで」と前書し、沂風(得性号)発句・石蘭(一萍号)第三で巻かれた歌仙も入集している。

この年冬の湖南の摺物に「このひとつがひは豊後の国よりのせうそこなり」と添書し、沂風(得性号)の句と共に石蘭(一萍号)の「ゆふ顔やむし鳴そむる壁の中」の句が掲げられているといふ。又この三年の「時雨会」にも

筑紫に旅寝して

時雨せよ松垣が家の集よまむ

同じ旅行に

行脚
沂風

背負ふものみなうち着たり初しぐれ、一萍

と遠く句を寄せている。沂風の句によると、肥後にも杖を引いたよう、肥後大津の輕舟等編「賤家集」(寛政五年序)の石蘭序文に「予往年彼国に行脚せし因あればとて云々」と、石蘭も肥後行脚についてふれている。九月二十四日(寛政三年)付け杜音宛蝶夢書簡に「沂風等にも預御書中忝御座候、無事にて此節長崎見物に肥後より下り候由、閑人どもの境界に候、頓て可致帰庵候」とあり、沂風は肥後より長崎見物に赴いたようなので、石蘭も同行したのであろう。又五月四日(寛政四年)付け杜音宛蝶夢書簡に「沂風法師儀御尋被下候、無事にて先月六日豊後よ

り書状到来候、大かた近日可致帰寺候」と、近々の沂風の帰庵を報じている。高木蒼梧「無名庵歴住小伝」に沂風は「翌四年春無名庵を辞し、滋賀村に隠退し云々」と記してあり、「四年春」は右の書簡により「四年夏」に訂正さるべきかと思うが、ともかくその頃帰庵したものであろう。

一方石蘭はそのまま筑紫に旅寝を重ねている。寛政四年の「奉扇会」に

葉ざくらやうちしづまりて暮の山 豊後行脚 一拜更 石蘭

とあり、この頃俳号「一萍」を「石蘭」に改めている。又この年の「時雨会」に、

筑紫にありてけふの会上の人々に申す

またうき世薦もかぶらず幾時雨 行脚 石蘭

とあり、時雨月の頃も筑紫にあって俳行脚を続けていたらしい。石蘭引杖の地は九州各地にわたったと見られるが、明確に知られる土地は前にふれた以外に、豊前小倉や筑前秋月の地があり、風猪・弁児追悼集「みの虫」(青人編)に「六出庵石蘭」として跋文(寛政四年水無月)を書き与えたり、「祖翁百回忌」入集の秋月連中の歌仙面に第三をつとめたりしている。なお「祖翁百回忌」には、(筑前)福岡・博多・飯塚・山野・若宮・綱分・日春・木守・直方・植木・黒崎・秋月・津屋崎・宗像・若松・赤間。(筑後)久留米・田主丸・善導寺・小郡。(豊前)中津・小倉。(豊後)杵築・日出・日田・中田・高田。(肥前)長崎。(肥後)隈本・大津・山鹿・木葉・腹赤・長峯・宇土・求摩・網津・八代。(日向)宮崎・本庄・延岡。(薩摩)鹿児島。(大隅)〔老岐〕等広範圍にわたって、それも蝶夢門のみ

ならず野坡系・美濃派など諸流派の俳人たちの入集が見られるが、これはおそらく沂風ならびに石蘭の三年にわたる句勸進の成果であろうと考えられる。

石蘭が筑紫を去って近江に帰ったのは寛政五年春の頃であろうか。同年四月十日から十二日までの三日間、義仲寺において芭蕉百回忌の催しとして、重厚を主人役とし懐旧の俳諧百巻が興行されたが、その数巻に石蘭の名を見出すことが出来る。蝶夢門の高弟たちに交じって石蘭もこの俳筵にかいがいしく立ち働いているさまが窺知される。又、この年は百回忌を記念し、芭蕉塚が各地に多数建立され、開眼供養の営みなどが行なわれている。その中で

○但馬竹田の法樹寺の花塚

○丹後河守の清園寺のすゝ塚

○丹後田辺の智恩院の烏塚

の三塚は、いずれも九月から十月にかけて開眼供養の導師を蝶夢に依頼して来たが、蝶夢は義仲寺の行事の準備などに多忙で行けず、代わりに石蘭法師を遣わして代香せしめていた。従来石蘭を蝶夢の門下としてあげたものを見ないが、しかし既に述べたところで明らかなごとく、寛政期のかれは蝶夢の門弟同様に見なして扱ってよいように思われる。右の代香の件にしても、石蘭に対する蝶夢の信頼と、芭蕉顕彰事業に熱心な蝶夢に對する石蘭の心服と協力をそこに看取出来よう。あの大々的な蝶夢の芭蕉顕彰事業の陰に、重厚・沂風・千影・石蘭といった助力者の存在していたことは十分注意する必要がある。

芭蕉百回の遠忌に關するもろもろの行事も無事終了した後、石蘭は久しぶりに駿河沼津に帰り、翌六年正月六華庵二代官胤の庵で、梅の会の法案俳諧を興行している。そして暫くこの地に住していたようであるが、翌七年正月は上京して京都にあり、客舎にて梅の会通夜独吟の俳諧を卷いている。大津の西方長等山に草庵を結んで居住するようになったのはそれから間もなくであろうか。湖南の閑静な庵住生活をもとめてのことと思われる。しかるにそうした石蘭が、再度筑紫への旅に向かったのは同春秋であった。その理由は、蝶夢追善集「萩のむしろ」(寛政十年跋) 入集の石蘭の句の詞書によると、長等山の庵に蝶夢から「身はくづをれ六識すでに尽ぬ、汝はひかくれて何をかなす、などか此道に縦横せざる、この老婆心わするゝ事なかれ」との叱咤の消息を得、これを身にしみて覚えた石蘭は、蝶夢の激励・鼓舞に従ったのである。ところが、その年師走に蝶夢は遷化し、そのことを石蘭が知ったのは翌八年二月のことであった。

(前略) 去年の師走遷化し給ひし事をしらぬ火の筑紫に来て、その如月の望月のころ、鎮西の寺々の鐘の声殊更にうち覆る悲しみの涙に筆をひたして

魂も見えよ願ひの西の山ざくら 石蘭(萩のむしろ)

さて、このようにして石蘭が筑紫に再遊したのは、前回の行脚の折にこの地方の俳人たちと因みを生じたことによる。特に筑前―それも遠賀・鞍手・嘉穂地方の俳人たちと石蘭との間

に、親密な雅交が持たれていたことは「梅の会」によっても明かである。当時遠賀川筋俳壇は、長崎往返の多くの俳人達の通過による刺激によってやや活況を呈しており、花縣や尺父のようにこの地方の俳人たちと關係を持った行脚俳人もいた。しかし、この地に庵住してじっくりと地元俳壇を正風に導こうとするそうした理想を持った指導者は少なかった。蝶夢の書簡を身にしみて覚えてこの地方に下向した石蘭は、地元俳人たちにとってまさに得難い俳諧師の一人であったのである。かれは蝶夢の芭蕉復帰、俳諧復興精神の理解者であり継承者でもあったし、又「蘭子が句、清香梅花の如く、風姿星の輝るに似たり」(寛政九年刊梅の会・風巻序)と評されているように、

草に寄木により行や春の水

(梅の会)

念ずれば白梅月を吐夜かな

()

難波より降はじめけむ春の雨

()

春の水山城やまと河内かな

(春の光・常盤木集)

星影の地にしむ夜寒心哉

()

夕風のいろ／＼に寒き花野哉

(そのみなつき)

稲妻のきのふの雲や小夜しぐれ

(まつしのるし)

たちいでて探幽恋しゆふがすみ

(俳人遺墨)

など、その句風は清澄温雅であり、すぐれた作も多く、そうした点で地方俳人たちに迎えられたのであろうと思われる。

ところで、石蘭の地方俳壇史における業績の一として特記されるのが次の「梅の会集」の刊行である。

本集は岩波「国書総目録」に寛政七年のもののみあげられているが、同八年・同九年・文化八年のものも管見に入っている

る。なお七年のものに「往年宰府の官に詣しより春ごとの恒例として」とあり、九年のものに「春ごとと奉なれつる事よとせ五年と数そひ、将かく詣奉るもあまたゞにさへなれば云々」とあって、これらによれば「梅の会」は寛政五年頃に第一冊は刊行されたように推量される。

ただし、六年は石蘭旅中のために未刊、その一部を七年のものに収録上梓している。そして以後毎年春ごとに太宰府天満宮奉納の年刊句集として公刊し、石蘭死没の年まで続けられたと見られる。文化八年のものは、門弟松原一萍編のもので、「没後は其ことの絶たりしを、こたび人々にそゝなかれて」石蘭の志願を継いで刊行したものである。が、これがこの年一年限りであったかどうかは不明である。

次に現存「梅の会集」について、若干の書誌的説明を加えておこう。

- ①寛政七年「梅の会」、天理・柿衛・松宇・直方加藤家所蔵。
(写本水口豊次郎氏蔵)。半紙本一冊、全十五丁、題簽中央無辺、書肆名なし。内容は寛政六年正月廿五日法楽歌仙（連衆沼津六花庵連中）、諸家春発句（69句）、寛政七年正月廿五日京都客中通夜独吟歌仙（石蘭独吟）、諸家春発句（111句）。
- ②寛政八年「梅の会」、九大研究室所蔵。半紙本一冊、全十三丁、題簽中央無辺、京菊舎太兵衛刊。内容は寛政八年正月廿四日宰府通夜興行歌仙（連衆直方・福岡連中、奉納春発句（11句）、諸家春発句（185句））。

③寛政九年「梅の会」、九大研究室所蔵。半紙本一冊、全廿五丁、題簽中央無辺、京菊舎太兵衛刊。内容は大椿庵胤魯

序、寛政九年正月廿五日宰府連歌堂興行奉納俳諧歌仙（連衆直方・植木その他）、梅発句（16句）、諸家春発句（83句）、吾来・石蘭兩吟歌仙、諸家春発句（179句）。

④文化八年「梅の会」、小倉城所蔵。半紙本一冊、全十一丁、題簽剥脱、大阪松井忠蔵刊。内容は一萍序、宰府奉納俳諧歌仙（連衆直方・芦屋その他筑前連中）、諸家春発句（79句）、付録諸家発句（30句）。

これらを通して理解出来る「梅の会」の一般形式は、菅公の祭日に当たる毎年正月二十五日、筑前太宰府天満宮において、石蘭と直方・植木・福岡などの連衆と興行の奉納歌仙一卷、出座の連衆の梅を詠じた奉納発句、そして諸家の春の発句を並べるといふ形式をとっている。

そして、この会式の企てや集の刊行は、実は石蘭がかつて身をおき、寛政二年には自ら催し主をつとめたことのある義仲寺の「時雨会」のそれにならったものに違いない。因みに石蘭（當時「淳号」編「時雨会」（寛政二年刊）は、時雨会奉納の歌仙一卷、出座の連衆による奉納の時雨の発句、諸家の奉納発句の形をとっており、明和から天保に至る年刊句集「時雨会」は、基本的には大体この形式によっている。

従って、寛政期筑前に来遊した行脚俳諧師石蘭は、古来文学の神として信仰を集めている太宰府天満宮奉納という形で、義仲寺「時雨会」の会式などに学び、筑紫における俳諧精神の高揚ならびに俳諧活動の核として、この「梅の会」の行事を発起し、年々熱心にその興行出版に当たったと考えられる。

ついでながら、石蘭の影響の及んだ地域を知るために、一例として寛政八年のものによって入集者を眺めると、総數百八十五名のうち九州百十一名、しかもその大半が筑前の住で、直方・山野・飯塚・植木・本道寺・秋月・福岡・赤間・武丸・竜徳・鶴田・磯光・新入・木屋瀬・芦屋・黒崎などの俳人たちである。

『仙玉集』には、再遊後の石蘭の住地について「筑前植木三池庵ニ住ス、又芦屋金産小路ニ住」と記す。植木住については大谷篤藏教授紹介の「大坂御城代勤役中直書留」の寛政十二年の捨文に「植木ニ住庵致候石蘭」と見え、伊藤常足著「鷲見日記」に同地の堤に住し構を植えて「いすのもとひなぬし」と称したという。芦屋の「金産小路」は大庭勝一氏によると「金台寺小路」の誤りとのことである。金台寺は同地中小路町にあり、山号海雲山、時宗遊行派本山相模藤沢山清浄光寺の末寺である。相州を本貫とする行脚俳諧師石蘭が、この寺の傍に草庵を結んでいたので納得のいくことであると思われる。

素頑編「松影集」(文化三年序)所収の「紀の国屋の返古に有しを」と前書した

みの虫の動き出しなはるの雨 石蘭

蚕をうつすはつ桑の色 撫節

行水の音ちかき家うらゝかに

(以下略、一折)

の連句は、芦屋にて門弟撫節と巻いた兩吟であるが、石蘭最晩年の作と見られる。かくて文化二年五月十日、漂泊の俳人石蘭はこの地にて生涯を閉じた。享年は不明。沼津を去って十六年

目であり、中年に致仕したとすれば六十前後か。大庭氏の御教示によると、金台寺の過去帳に「石中庵秀宇石蘭居士」と戒名を止めており、下に「石中庵撫節」と記してあって門弟撫節が葬送などの後事に当たったらしい。

翌三年二月、妻知栄の勸進によって、芦屋禪壽寺に「人住まぬ此山井や秋の月」と刻した句碑が建立された。知栄については詳しいことは一切不明である。

石中庵の庵号は、石蘭の高弟、芦屋の松浦撫節(通称藤右衛門、天保二年没、六十七歳)と直方の松原一萍(通称逸平・正香、没享年不明)が継ぎ、師の衣鉢を守りそれぞれの地域俳壇の中心となって文化文政期に活躍を続けた。その様子は奇淵の「雪つくし」や夷朔の「筑紫琴」によって知られる。

むすび

かつて素琴は「一萍は注意すべき程の俳人ではなからうが、義仲寺・乙児・几董・臥央に關係を持つ点で一考して置いてよい人であらう」(「乙児の末弟一萍」)と述べ、他石は石蘭について「どこの誰やら未考である。(中略)雪門の一風客であったのであらう」(「六華庵三代」)と記した。この一萍と石蘭が同一人であることを明らかにされたのは、既述のごとく燕々であった。筆者は、素琴・燕々の研究を手がかりとして、あまりに不明なこと多く、これまで俳諧研究者に殆んど注目されることもなかった石蘭の出自・経歴などについて考察を加えた。

乙児門弟であり、官単に兄事していたと思われる石蘭が、寛政以降蝶夢と深い關係をもち、蝶夢の門弟並みに活躍してお

り、彼は蝶夢の俳諧精神の理解者であり、かつ助力者としてその運動に貢献するところがあつたことを述べた。

又、寛政二期度の筑紫行脚の目的や意義について考え、なかなか石蘭の俳業の一つである「梅の会集」の現存伝本の紹介と、それが義仲寺の「時雨会」にならつたものであり、このような太宰府奉納年刊句集の刊行は、九州地方俳壇史の上においてすこぶる注目すべき業績であることを記した。(以上)

(注)

- 1 俳書叢刊第三期14「几重句稿 九」に翻刻がある。
- 2 昭和九年七月、静岡志豆波多会発行、駿河叢書第十五編。
- 3 「新類題発句集」に「一萍」号で見える「翠巖こしの君みることし」の句が「としへの梅」に「石蘭」号で入集していることを燕々は指摘している。
- 4 大庭勝一氏の御教示による。
- 5 九月四日付、白鶴短蝶夢書簡に「奉屆会に一萍等名なきよし御不審候、沂風同道春已来筑紫へ参り居申候、もとより彼等のはかの者共の寺に非ず候得は、當時の留守居の名前出し候也」。
- 6 「義仲寺一萍」として入集。俳書文庫5による。
- 7 板本は明大図書館、写本岡山市立図書館燕々文庫所蔵。
- 8 乙児の「大和行」に「としごろ書音の友にして」と記す。この旅中に乙児は蝶夢を訪問している。
- 9 この仏像は寛政四年蝶夢の骨折りで壊成した阿弥陀寺の丈六の仏像であろう。
- 10 下垣内和人氏「近世芸備地方の俳諧 第五集」所収。
- 11 当時はまだ「一萍」号の答なので、翌々年刊行時の号に改めたものであろう。
- 12 高木春梧「義仲寺と蝶夢」「蝶夢書簡篇」P.146。
- 13 同右P.153。
- 14 「義仲寺と蝶夢」所収。
- 15 西村燕々「一萍あらため石蘭」(「東炎」第八卷三号)。

16 魚澤編「花塚集」(寛政五年刊)、無釋編「すゝ塚集」(同)、木越編「烏塚百回忌」(同)による。共に明大図書館所蔵。

17 寛政七年の「梅の会」による。

18 花縣については「まつしるし」等、尺交については「しらぬひ六歌仙」「雪の道」等参照。

19 「国書總目錄」参照。

20 「近世大阪芸文叢談」所収「寛政十二年大阪俳諧師一件」。

21 「直方市史」参照。

22 藤本春秋子氏「芦屋の俳人と歌人」(「芦屋町誌」所収)。

23 「俳考録(二)」(「東炎」第七卷十一号)。

(付記) 本稿をなすに当たり、石蘭についていろいろ御教示を得た大庭勝一氏・田中道雄氏、芦屋禪寿寺などを御案内下さつた同地の藤本春秋子氏、「梅の会」のコピイ等で御迷惑をおかけした井上敏幸氏、明大図書館蔵俳書ならびに「六華庵三代」の閲覧について御高配を得た木村正中氏、以上の方々に深謝申し上げます。

(追記) 脱稿の後、大分市の大塚文庫にて偶然に石蘭追善集を一見したが、他に伝本を知らないものなので簡単に紹介しておく。半紙本。刊本一冊。全二十九丁(但し途中二丁損脱)。題簽を逸し書名不明。月居序。一萍跋。菊舎大兵衛刊。内容は石蘭追悼のために筑前芦屋・直方・博多・宗像等の門下の間で興行された版起歌仙・追悼吟・四時混雑の句から成る。刊年の明記はないが、詞書中に「小祥忌」の語が見え、一周忌集として文化三年刊と推定される。編者は石中庵二代の直方の松原一萍。その跋文中に「おのれこの門に遊ぶ事十五年」とあり、寛政三年石蘭入門であることがはっきりしとあり、月居と石蘭とは友人関係であつたことが明らかとなつた。なお石蘭の享年は知られぬが「老師」とあるので、本文中に推定した説はほぼ妥当であらうと思う。終わりに大塚富吉翁に深謝申し上げます。